

釣りに釣られて

高原英夫

第十八回 「ビギナーズラック」

もう三十年以上も前の話である。転勤先の八戸支社の釣り仲間で船を出すことになった。その中でも支社の一番のおエライさんは釣りの大ベテランで、一度お宅へ訪ねて酒を飲んだ時、持ちきれないほどのたくさんのオモリを箱から取り出し自慢気にみせてくれた。白いアワビの貝の細工だったかそれを取りつければもう敵なしという話に大いに盛り上がった。

一方、T君は転勤してきたばかりで何を釣ろうとしているのか、どうすればいいのかまるでチンプンカンプンで、ただつきあいで一緒に行けばいいのだと思つていゝる風だった。

船は当時の階上村から出し、狙うのはアブラメだった。当時は手釣りで、しぶ糸を小田巻に百五十メートルほど巻き、下には両天秤を下げ、その天秤の中央にいつも百号のオモリを取りつけた。針は丸セイゴの十五号くらいだったろうか。準備はいたつて簡単で、シンプルだった。

おエライさんとT君も含め六人で出漁となった。エサはエラコなので、出船と同じ時に筒状のものが何十本も固まりとなっていて中から、一本ずつほぐし、筒状の殻からエラコをしぼり出して針に取り付けなければならない。二、三十匹位を事前に用意しないと、スムーズに釣りはできない。というのも、一度海に降ろせば、エラコは軟らかく、ほとんど釣れる釣れないにかかわらずとれて無くなってしまう。それと日中、陽に照らされつ放しとなるので濡れた新聞紙でエラコの固まりを覆っておく。さもないと、乾いてしまつてエラコを殻からとりだすのに、これまた大変な手間がかかつてしまうのだ。

さあいよいよ釣りはじめた。両天秤の針に二、三匹のエラコをつけ、海に降ろす。カラカラと小田巻は回り、やがてオモリが底に着く。人差し指の腹に全神経を集中し、海底にいるつもりになって食いつくのを待つ。ガツ、ガツとくればアブラメに間違いない。一回腕を大きく上げて合わせる。あとは船べりにシブ糸をかけながら、両手でたぐるように巻き上げる。アブラメの引きは強烈だ。途中何度も頭を振り、体をよじり、暴れるのが指に伝わってくる。

T君は幸先よく一本目を上げると次から次へと釣りまくった。さて、おエライさんはと見ると、一人竿を持ち泰然と構えているのだが一向に釣れてこない。例の貝殻の細工はしつかりとつけてある。

何しろT君は初めてなのでかかる度ごとに

「きた！きた！ またきた！」とばかりに歓喜の声を発するものだから、船中は、またT君かと互いに顔を見合わせ、はて自分のアブラメはどこにいったものかと目を泳がせていた。そのうちに今度は、

「重い、何だべ」

それまでと違い、引く様子もなく、根がかりし、そのまま石でもひっかかり上がってきているものとばかり思っていた。

「タコだあ！」

船頭はタモを持つてかけつけ、タコが船底に吸いつかないようにと声をかけながら、タモに入れた。大きな大きなミズダコだった。クーラーに入れたのだが、ほんの少しの隙間から足を出し、何度も外へ逃げ出した。その日はともかくにもT君

のための釣りの日となった。仲間の一人が私に寄って耳打ちをした。

「おエライさん、どうしたんだ。たいしたことないな」

ただおエライさんは、永い経験の中から、ノド奥にかかり、とれなくなった針の外し方を手ほどきしたのだった。鉛筆くらいの棒をノドの奥まで押し込み、ハリスも一緒に巻くようにクルクルと魚を回転させると、ドサツと魚は床に落ちた。やつのことで面目が保たれていた。

そんな日からほぼ二十年。私もベテランといえる頃になっていた。歳もそろそろ五十というころだった。

会社の同じフロアなのだが、隣の部にS君がいた。特に釣りに魅せられている風でもないのだが、釣りクラブに入っていた。釣りよりむしろ、かなりの人数が入っているクラブの飲み会のほうに惹かれて、会員に名を連ねていたのだと思う。

春六月、恒例のカレイ釣り大会の日が近づいてきた。S君が私の席に近づき、「カレイ釣りやってみたいんですが、教えてください。道具も何もかも無いので、

よろしく頼みます」というのである。言つてはなんだが、何人となぐ一から教えた人間はある。当然引き受けた。ただ、今後どの位の角度ではまり込んでいくのかはよくわからず、とりあえずカレイが釣れば良いというくらいのレベルにしようということになった。すぐ近くの釣り具店に二人で行き、竿、リール、仕掛け、など一通りの準備はその日のうちに終えた。

そして翌日からは、簡単に丈夫なハリスのつけ方を何度も実際にやらせ、体で覚えてもらった。そして何よりもカレイがどんな感じでエサに寄ってきて、食いつき、どのタイミングで合わせればいいのか、実際に竿を持たせ、私はテグスを持ち、そのアタリを感じを再現して見せた。

「ピクピクときても、すぐ上げてはダメだぞ。十分食わせてからだよ」

「うーん わがった」

会社の事務所の中のやりとりである。女性の事務員はクスクス笑っていた。

いよいよ当日となった。大会は浅虫前沖だった。二艘の船が出たが、私は当然S君と同じ船にした。浅虫でのカレイ釣りはそれまでも何度かやっているが、あまり

いい思いをしたこともなく私は大した期待もしていなかったが、S君はやる気満々だった。もつとも期待はしていないものの、だからといって気を抜いてということではない。釣りはひとコヅキひとコヅキが勝負で、いつ食いつくのか緊張とまでは言わないが、集中力を絶えさせてはいけない。

そのうち八人乗った船のそちこちで声が上がりはじめ、S君にもきた。

「師匠、生まれて初めてのカレーです」

二十センチを超える位の食べるには丁度いい大きさのやつを、テグスにぶら下げて私に見せてくれた。仕掛けは私が選んだからわかっているが、このうえなくシンブルなものだった。

一方の私は、手造りの仕掛けで実に凝っていた。一時間がたち、二時間がたち、S君はまたか、またかと釣り上げていく。どうも私の三倍のペースのような気がする。はじめのうちは子を見守るような慈悲と寛容とあらゆるやさしさを語る形容詞つきで見えていたのだが、途中から、「師匠またです」の声に素直に「よかったね」と喜んでいない自分に気がついた。頬の筋肉がピクピクし、どうも顔が本当に喜んで

いないように見えてはいないだろうか心配になったのだ。言つては何だが、今日初めての人と、私とでは、私が釣れてあたり前すぎることなのだが、時はそんな思いも知らず、大会終了を告げていた。S君は二十数枚だった。そして私は五枚、残酷なまでの敗れ方だった。

それにしても、やつぱりビギナーズラックはあると確信せざるを得なかった。それは、自然が手配してくれる魚の命をかけた贈り物なのだと思う。

自分の竿で、想いを込めた仕掛けに、全く意思の通じない魚がかかってくる。モノを食べるのは自然の節理にしても、自分の考えた人工の物と、海の底の自然の中の生き物との間に一本のパイプが通った、自分の意思が自然に通じたとでもいうようなよろこびがはじめて実感として伝わってくる。

しかも、船上で生きてバタバタと跳ねている魚はまたいつそう大きく見える。おししそに見えるところよりは、やはり、どうしても生き物の魚として見ている。その命を手にする。釣りはその命と自然を相手にする人間の遊びなのだ。

身近に何人ものビギナーズラックを見、そのまま今でも彼らはのめり込んでいる。

私のそれは、岸壁にいる釣り人に声をかけて話をしていたら、投げてみるといわれ、背広姿のまま「こうですか」といつて投げたら、いきなり尺オーバーのアブラメがかかった。魚は持つて行けといわれて、仕事中に釣りをしていたとも言えず、会社のロッカーに入れておいた。独身の頃だったしアパートのひとり住まいで、包丁もなく、料理もできず、二、三日後に捨てた。なんとも不憫なアブラメであった。あの海からあんな大きな魚が自分の手で釣れるんだ。そしてあの引きをもう一度、もう一度と言っているうちに三十と数年が過ぎ去っていた。

平成23年8月